４年　ぞろぞろ

○単元目標

・「落語」のおもしろさを感じ取り、「落語」に親しもうとすることができる。（関心・意欲・態度）
・「落語」を暗唱したり音読したりしながら、自分の言葉で表現することができる。（話すこと・聞くこと）
・「落語」とはどのようなものか、聞いたり調べたりしてまとめることができる。（書くこと）
・「落語」が書かれている本を探して読み、そのおもしろさをとらえることができる。（読むこと）

○単元について

（１）落語学習の可能性

映像文化にどっぷりとつかって生活している子供たちは、文字から、その内容や心情を想像することをしなくなっているといわれている。自分の頭の中で、言葉をもとに豊かにイメージする力は、国語科として落としてはならない大切な「ことばの力」であろう。

落語は見るものではない。聞くものである。話し手の言葉を聞いて、自分の頭の中に自分の映像を描く学習としては格好の学習材であるといえる。話し手が「高い山だなあ」と言うのを聞いて、聞き手は自分の山を思い描くのだ。

また、話し言葉は一瞬のうちに消える。聞き手は言葉を逃さずに聞かなければならないから、聞く態度も、聞き方も自然に身につけることができる。「聞く態度」の育成は、国語科のみならず、学習習慣定着のために欠かせない。「話を静かに聞きましょう」と、教師がなんべんも言い聞かせるより、落語を聞かせたほうがよほど効果的であるということができる。

一方、子供が小さな落語家となって落語を上演するという学習も可能である。落語は、一人で、座って演じる劇のようなものだといわれている。そこには、聞き手を引きつける話し方の技術が要求される。声の抑揚や間のとり方から、顔の表情、身ぶり手ぶり、目線などに至るまで、子供は楽しく落語を演じながら、話し方の基礎から高い技術までを自分の力に応じて伸ばしていくことが可能である。音声言語活動が重視されるこれからの国語学習において、落語を学習材とした活動は、実にさまざまな、大きな可能性をもっているといえる。

（２）個に応じた学習活動

教室のすべての子供に、落語を覚えて上演しなさいというのは酷である。ただし、子供たちはその気になれば驚くほどの力を発揮し、今までに見せたことのない学習ぶり、落語の上演を見せてくれることも事実である。大切なのは、子供のやってみたいという意欲を大切にしながら、抵抗感を小さくして与えることであろう。

本単元の実践においては、次のようなことを子供たちに示した。

・落語は本来、一人で演じるものだが、ここでは友達とペア、あるいは小グループで演じてもよいことにする（できれば一人でということは強調したい）。
・落語は本来話をそらんじて演じるものであるが、覚えきれない人は、台本を見ながら読んでもいいことにする。
・単元の終末には落語の発表会を行うが、最後まで演じることができない場合は、途中のできるところまでいいことにする（しかし、自分の精いっぱいの結果であること）。

子供たちは、落語の楽しさを感じるようになると、自分も演じてみたいという思いが強くなって、授業時間以外にも話を覚え、演じられるように努力を始める。また、終末の活動で納得のいかなかった子供が、「もう一度やらせて欲しい」と言いに来たこともあった。

○学習指導計画

1　落語のビデオやＣＤを視聴し、そのおもしろさを感じ取る。

2　教科書の『ぞろぞろ』を読み、おもしろいと思ったところを紹介し合う。

3　『ぞろぞろ』を声に出して読み、落語家に挑戦しようという意欲をもつ。このときに、終末の活動で落語の上演会を開くという目的意識をもつ。

4　ビデオやＣＤの落語をもとに、落語家のすごいところを発見し、自分が挑戦したいことを具体的に見つけ、めあてをもつ。

5　めあてにもとづいて落語の練習をする。

・演目は『ぞろぞろ』でもいいし、自分のやってみたい他の話でもいいことにする。

・一人が基本だが、友達と一緒に演じてもいいことにする。

6　落語の練習と並行して、落語について本などで調べ、「落語新聞」を作る。

7　落語新聞を掲示し、落語の上演会を開く。各自の落語の上演ぶりはビデオに撮る。

8　落語の上演や調べたことをもとに、感想を書いたり、落語の上演ビデオを見てもらう人を決めて、その人に手紙を書いたりする。

※教科書以外に使用した学習材

・（読み物）『おもしろ落語図書館』全十巻（大日本図書）　三遊亭円窓著より「寿限無（じゅげむ）」ほか

・（ビデオ）『山藤章二のラクゴニメ』古今亭志ん生⑩　「饅頭（まんじゅう）こわい」

・（ＣＤ）　『落語名人会４１』柳家小三治１７　「死神」

『金原亭馬の助　名演集（二）』　「転失気（てんしき）」

・（インターネット）三遊亭円窓師匠のホームページ　http://www.dab.hi-ho.ne.jp/ensou/

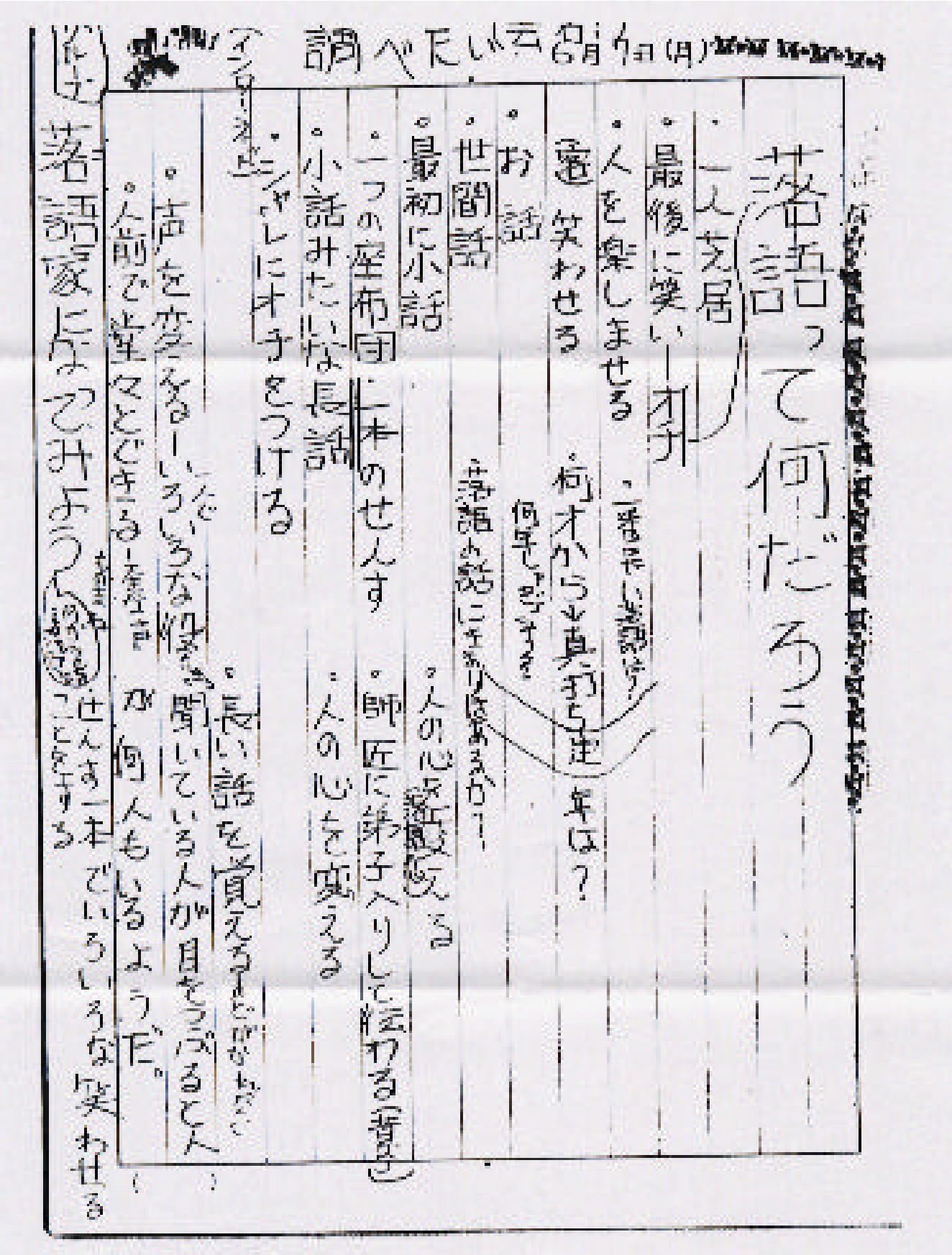
○本時の展開（その①）

・「落語ってなんだろう」から「落語家のすごいところ」発見へ

○展開例（その①）

学　習　活　動	指導事項・留意事項
1　「落語」とは何かを話し合う。 ・自分のもっているイメージを発表する。	・落語をテレビやラジオなどで聴いたことがあるか、尋ねる。
2　落語のビデオやＣＤを視聴する。	・聞かせることにとどめ、内容などについては詳しく尋ねたりしないようにする。 ・難しい言葉などについては、タイミングをみて簡単に補足してもよい。
3　教科書の『ぞろぞろ』を読みおもしろいと感じたところを紹介する。	・『ぞろぞろ』のビデオやＣＤで聞かせてもよい。
4　落語家に挑戦しようという意識をもち、落語家のすごいところを見つけて発表し合う。	・子供の素直な反応を大切にして、教師からあまり提示しない。

○子供のノート（展開例その①）



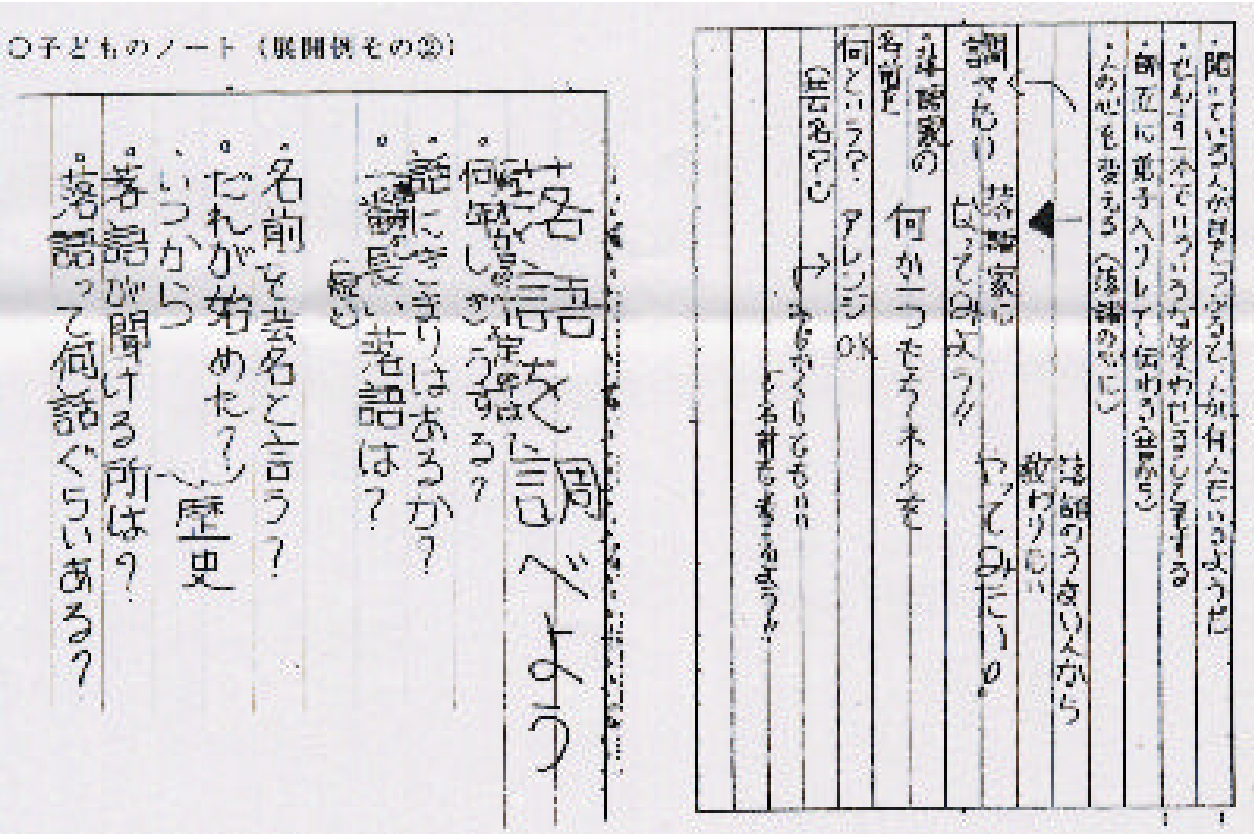
○本時の展開（その②）

・「落語」について調べよう

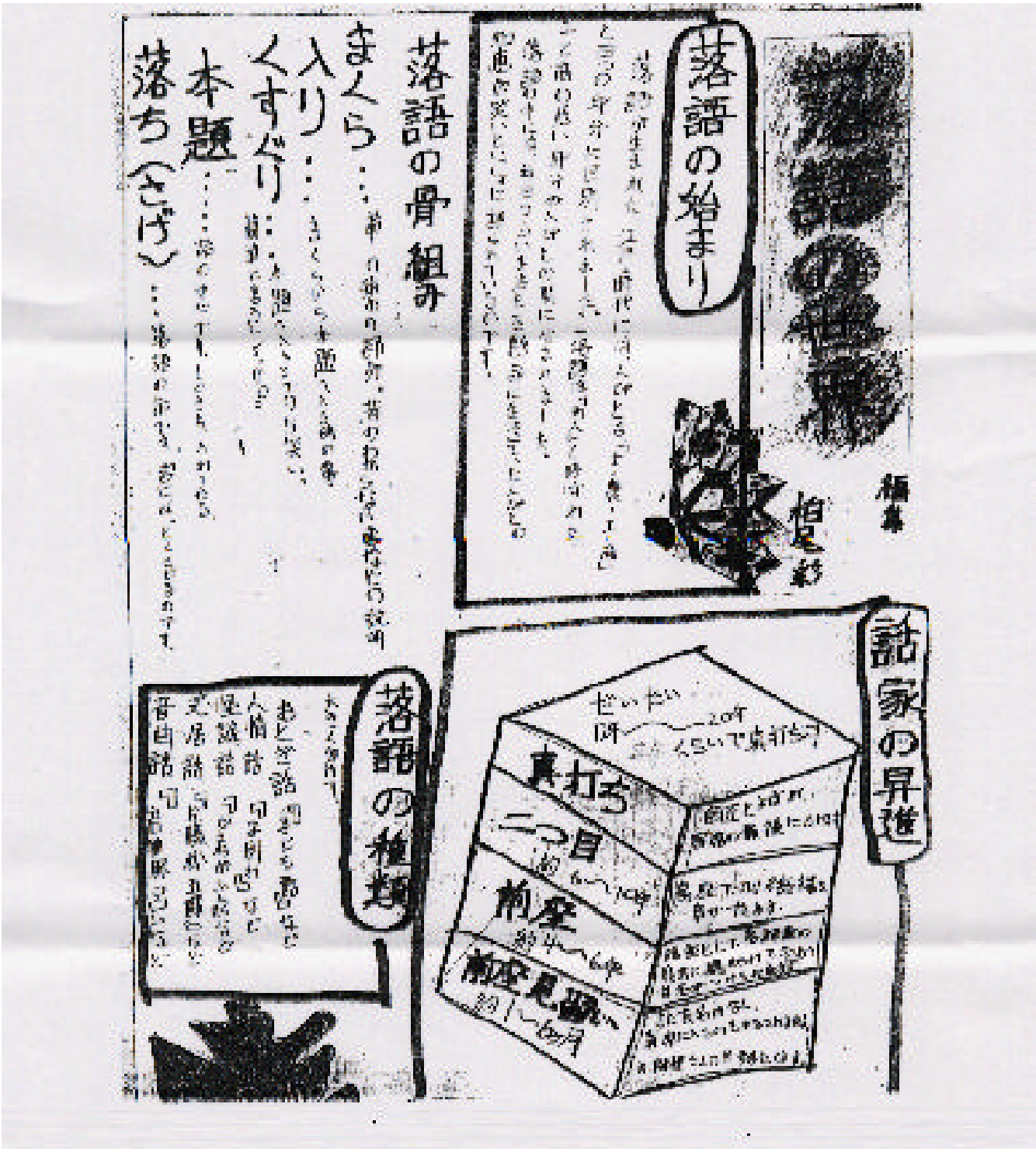
○展開例（その②）

学　習　活　動	指導事項・留意点
1　落語について、どんなことを知りたいかクラスで話し合う。	・内容にこだわらず、知りたいと思うことを自由に発言させるようにする。 （ここで、子供たちが落語についてどの程度認識をもっているのかがわかる）
2　どうしたら知りたいことを調べられるか、その方法を考えて発表し合う。	・本で調べる、インターネットなどで調べる、直接落語家さんにインタビューするなどの方法が考えられる。
3　各自で調べたことを新聞にまとめることを知り、自分の調べる内容について整理する（新聞の誌面構成について見通しをもつなど）。	・だれがどのような内容について調べようとしているのかを把握しておく。
4　学校の図書館などに行って、落語に関する資料がどのくらいあるか調べる。	・学校であらかじめどの程度の資料が用意できるのかを調べておくと良い。

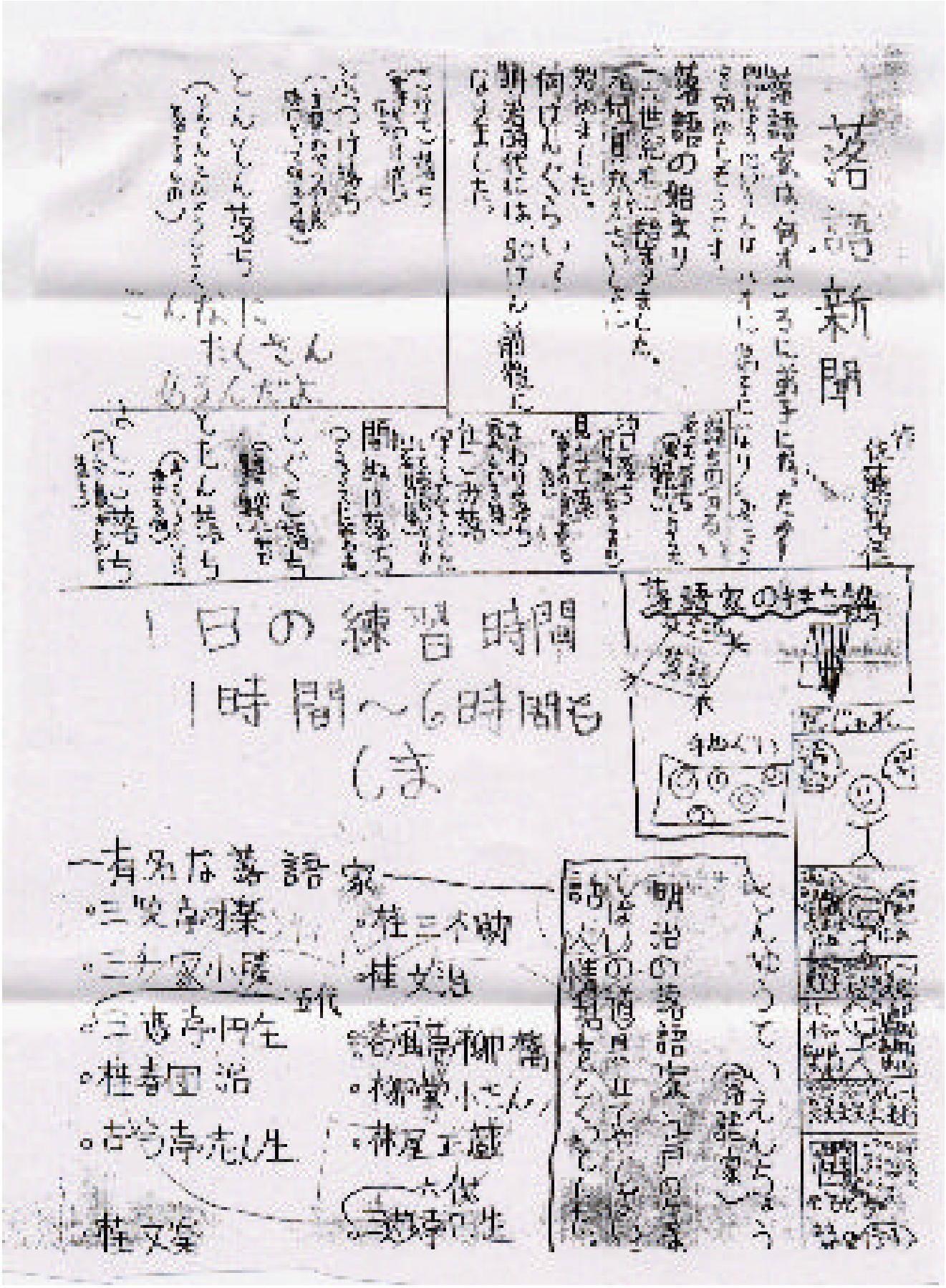
○子供のノート（展開例その②）



○子供が作った新聞


落語の始まり
落語の骨組み
まくら
入り
くすぐり
本題
落ち（さげ）
落語の種類
話家の昇進
真打ち
二つ目
前座
前座見習い

子供が作った新聞 2



○本時の展開（その③）

・落語を練習しよう。

学　習　活　動	指導事項・留意点
1　「ぞろぞろ」の冒頭部分を各自で音読する。	・暗記してしまっている子供には、何も見ないで言わせてもよい。
2　何人かの子供に、冒頭部分を音読してもらう。	・２～３人、読み方の違いがはっきりわかるような子供を選ぶとよい。
3　おじいさんとおばあさんは、どれくらい離れているかについて話し合う。	・声の大きさや声の伸ばし方などから、聞いている子供たちに考えさせる。
4　自分と相手の距離によって、声のかけ方や声の大きさ、戻ってくる返事の言い方などに違いがあることを知る。	・ビデオやＣＤ等を使って、プロの落語家さんはどのように話しているかを聞くのも効果的である。 ・相手の位置や相手との距離によって、自分の声の大きさはもちろん、目線などもかかわってくることに気づかせたい。
5　落語に登場する人物になったつもりで、相手がどこにいるかを考えながら声に出して読む練習をする。	・最終的には、クラスで一つにする必要はなく、各自が「自分はこういうつもりで話している」ということができればよい。これをクラスでまとめようとすると、落語の学習におもしろみがなくなる。
6　各自で自分の演じたい落語の練習をする。	・各自好きな場所で自由に練習する。友達どうしで聞き合うのもよい。

※落語の練習としては、教科書にある『ぞろぞろ』のほかに、「おもしろ落語図書館」に収録されている『転失気』も効果的である。（次項は『転失気』の冒頭部分）

転失気

ある日の和尚が、客をこたつで寝込んでしまって、すぐに、かかりつけの先生が往診してくれて、見うがけに、「和尚さん、転失気はおありでございますか？」と、聞いた。

和尚は、「転失気」という言葉を知らなかった。だったら、教えてあげいい、もしかも、知ったかぶりをする癖のある和尚は考えた。

「テンシキというものは、なんでも知らないものに違いない」と、勝手に解釈して、「ございますとも」と、答えをした。

先生は「あるですか」と言って、帰っていった。

さあ、和尚は本の言葉が頭に残って仕方がない。

和尚「テンシキ？　さて、何だろうか？　そうだ、今、まも、先生を呼びにやるにはちょうどいい。そうだ。

「先生を呼ぶに、使者、知恵」

使者「ハーイ」

和「テンシキを知っておるか」

使「テンシキ？　なんですか、それは？」

和「ほれ、テンシキを知らないやつがあるか。だいいち、頭を使えとるずだ」

使「すいません、知ったかぶりしたり、また、教えてください。テンシキってなんですか？」

和「知れても、また、あたり前えでもある、というものは、いかない。外へ行って、聞いておいてきなさい。門前の花屋へ行って、借りてきなさい。『ない』と言われたら、先生のところへ行って、借りてきなさい」

使「わざわざ、行くんですか」

和「知ったかぶりをしたのは、自分のことは自分でなんとかするのじゃ。行ってきなさい」

使「ハーイ。

二花屋へ行って、すいません、花屋さん。テンシキを貸してください」

花屋「テンシキ？　三日前に、二つあったんだが、床の間の飾りにしておいたんだが、客に二つとも貸してしまった。一つは今朝、もう一つの方にして食べちゃった」

使「そうですか。お邪魔しました」

和尚「テンシキ」

注釈
お経の言葉。

〔　〕の中は、読みません。

注釈
意に基づく病気を見てくれること。

○子どもの感想

落語を聞くと作り話というより、たった今そこで起きているげんじつの出来事のような気がします。どうなるか、どうなるか、ハラハラしながら、また笑いながら話を聞いていて、さいごに大笑い。これがおもしろい。落語にはいろいろ話があるけれど、その全てに何か共通点はあるのか、話す時にきまりはあるのか。そういった事をこれから勉強したいです。

落語の勉強を始めて、やりがいができました。落語は一人しばい。一人で何人もの役をやらなければなりません。話しかたはしんけんにきくと、まるで本当にたくさんの人がしゃべっているようにしかきこえないほど。さすが声の大きさ一つでもひみつの話のシーンとびっくりしたシーンでは大きさがちがいます。これだけ使い分けるなんてほんの小さな所にもちからがあり、この小さなちがいが聞く人に大きなえいきょうをあたえています。

[illegible]

[illegible]

でも、うまくいったのでよかった。今度は他の落語はどんどんチャレンジして落語家になりたい。